



ふるさと

ねやがわ

## いつも暮らしの中にある

輪ゴムのトップメーカー、株式会社 共和

すぎはらまさひろ  
社長 杉原正博さん(57歳)

第18回

輪ゴムを作り続けて100年。茶色と黄色のデザインでおなじみのパッケージを手に、寝屋川市生まれの杉原正博さんは「どの商品も派手ではありませんが、いつも暮らしの中にあります」と笑顔で話します。会社設立は大正12年ですが、国内初の輪ゴムができたのは、もう少し前のことです。もともと自転車のゴムチューブを輪切りにした、真っ黒で硬い輪ゴムが主流でした。しかし、創業者が大正6年に世界で初めて今のようなアメ色の輪ゴムの開発に成功し、大ヒット。これが現在の輪ゴムの礎になっています。

### 「背高いし声大きいから合格や」 偶然の出会いで就職

割り箸の鉄砲で輪ゴムを飛ばして遊んだ人も多いことでしょう。そんな話題に「ゴム銃のちゃんとした団体があつてね。その団体の公式競技で、うちの輪ゴムが、競技推奨弾、なんですよ」。日本ゴム銃射撃協会の公認は長年築き上げた信頼の証しなのです。

「入社はたまたまでした」。本命

### 私とふるさと

寝屋川市出身なんです。実は全然覚えていないんです。生まれて1年ほどで母親の故郷の鳥取に引っ越したからです。3歳で神戸に移り住み、記憶にあるのはこの頃からです。

でも、母親がよく寝屋川時代の「ママ友、に会いに香里園に行っていたので、この近くに新居を構えていたのだと思います。父親は2階建ての文化ハウスだったと言っていました。

そこで私は「カタカタ」という木製のおもちゃやビニールのプールで遊んでいたようで、そんな白黒の写真を見たことがあります。

だった会社の最終面接に落ち、困って就職課を訪れた天理大学4年生の秋のこと。「その日に偶然、大学OBで共和の次長が、『学生を一人欲しい』と頼みに来ていました。すぐ面接し、『背も高いし、声も大きいから合格や』となったんです」

### 「サラリーマン人生で一番大変」 海外工場で労働組合と対立

翌年の昭和60年に入社。父親には「二度入ったら最後までおらんとかん」と言われたそうですが、「辞めようと思ったことは一度もありません」。しかし、入社24年目で赴任したマレーシアの子会社で「サラリーマン人生で一番大変だった」という大きな壁にぶつかりました。

従業員210人の工場で、日本人は杉原さんただ一人。言葉の壁もありましたが、仕事への考え方が日本と全く違いました。例えば昇給。「仕事ぶりに関係なく、給料は上がってもみんな同じ額。能力に見合った給料にと何度も労働組合と交渉しましたが、分かってもらえず、本当に参りました」。それでも7年間の駐在を終え



マレーシア工場の従業員たちと杉原さん(右から2人目)

て帰国する際に組合幹部の一人が「ミスター・スギハラが正しかったよ」と言って送ってくれました。

### 「いつも頭は低く」 お客様第一でモノづくり

輪ゴムの国内シェアでは今も約50パーセントを誇りますが、被覆電線や医療用品など創意工夫で成長を続けています。杉原さんは、海外での活躍も買われて2年前、会社のトップに就任しました。「若い頃は社長を雲の上の人と思っていた」という杉原さんの経営理念の一つが「いつも頭は低く」。「お客さんや下請けさんあつてのメーカー。横柄な態度やふるまいは絶対にあかん、と言い続けています」。

4年後は創業100年の大きな節目。老舗メーカーの社長は次の新しい時代を迎えてもモットーの「お客様第一主義」で突き進むつもりです。

